



●イスラエルが復興された 1948 年以降、徐々にですが、メシアニック・ジュー(イエシュアをメシアと信じるユダヤ人)が現れ、異邦人クリスチャンに大きな影響(良い意味で)を与えるようになってきました。初代教会の最初の人々はすべてメシアニック・ジューだったのですが、ローマのコンスタンティヌス帝以降、キリスト教の歴史において逆転現象が起こってしまい、反ユダヤ主義によって、多くのクリスチャンがユダヤ人を迫害してきた歴史があります。しかし神は終わりの日に備えて、今や多くのメシアニック・ジューの人々を起こしています。**初代教会をモデルとした真の教会が再び整え始められて来ているのです。**イエシュアが「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍も受け、また永遠のいのちを受け継ぎます」(マタイ 19:29)は、メシアニック・ジューに当てはまります。本来、家族を最も大切にユダヤ人ですが、上記のみことばが示すような犠牲を払ってまでも、イエシュアをメシアとして信じたことで、その者がいた家では葬式がなされると言われています。

## 2 章 16 節

εἰδότες [δὲ] ὅτι οὐ δικαιοῦται ἄνθρωπος ἐξ ἔργων νόμου  
ἐὰν μὴ διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ,  
καὶ ἡμεῖς εἰς Χριστὸν Ἰησοῦν ἐπιστεύσαμεν,  
ἵνα δικαιοθῶμεν ἐκ πίστεως Χριστοῦ καὶ οὐκ ἐξ ἔργων νόμου,  
ὅτι ἐξ ἔργων νόμου οὐ δικαιοθήσεται πᾶσα σὰρξ.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2 章 16 節

しかし、人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められるためです。というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによって義と認められないからです。

●接続詞の「ホテイ」(ὅτι)は、「**私たちもキリスト・イエスを信じました**」(16 節の**主文**)の**理由**を示す挿入句です。その挿入句とは「人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知ったこと」です。また、「ヒナ」(ἵνα)でその**目的**、すなわち「律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められる**ため**」です。さらにその**目的の理由**が「ホテイ」(ὅτι)によって、「**というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによって義と認められないから**」という構文になっています。

●パウロはユダヤ人であることに誇りを持っていました。その誇りは彼らに律法が与えられていたからです。ローマ人への手紙 3 章 1~2 節を見ると、「ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。・・第一に、彼らは神のことばを委ねられました」とあります。「神のことば」とは「トーラー」のことであり、それは「律法」と訳されています。パウロは「律法による義については非難されるところがない者」であったことを述べ

ています(ピリピ 3:6)。そのパウロが、ここでは「人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました」とケファに言っているのです。直接的にはケファに言っていますが、同時にガラテヤ人のキリスト者にも暗に語っているのです。

●「**律法を行うこと**」と「**イエス・キリストを信じること**」が対比されています。そして、ガラテヤ書で初めて「**義と認められる**」という表現が出て来ます。それは神に受け入れられることを意味します。「**義と認められる**」と訳されたギリシア語は「**ディカイオー**」(δικαίωω)で、16節の中だけで3回、つまり、①現在受動態(δικαιοῦται)、②アオリスト受動態(δικαιωθῶμεν)、③未来受動態(δικαιωθήσεται)が使われています。「義と認められる」とは「神に受け入れられる」こと、すなわち、「救われる」ことと同義で、その場合、現在受動態の「救われている」、アオリスト受動態の「救われた」、未来受動態の「救われるだろう」と表されます。「義」は神との関係概念を表す語彙で、神と人とのあるべき正しい関係を表します。かつてのパウロは、律法の行いによって神の義が得られると信じ込んでいました。ところが、「律法の行い」によっては、救いを獲得することはできないことを、身をもって知らされたばかりか、「ただイエス・キリストを信じることによって義と認められる」ことを知ったのです。「義と認められる」ことを「永遠のいのちを得る」「救われる」とも表現されます。あるいは、「神の国に入る」、「神に近づく」、「生ける望みを持つ」など、すべて同義です。

●16節の「キリストを信じることによって義と認められる」は、ガラテヤ書の**主題聖句**です。これまで、「パウロが使徒として選ばれた次第」(1:11~24)も、「使徒たちがパウロを受け入れたこと」(2:1~10)も、「ケファを非難するパウロ」(2:11~14)の三つの話、これらはすべて、この主題を述べるために不可欠な伏線でした。

●「**ディア・ピステオース・イエスー・クリストウ**」(διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ)を、新改訳は「**イエス・キリストを信じることによって**」と訳していますが、「**イエス・キリストの信仰を通して**」と訳することも可能です。「イエス・キリストに対する私たちの信仰」なのか、それとも「イエス・キリストが持たれた信仰」なのかの問題です。さらに、「ピステイス」(πίστις)は、「**信仰**」とも「**真実**」とも訳されます。旧約聖書のヘブル語では、「ピステイス」(πίστις)は、「エメット」(אֱמֶת)、ないし「エムナー」(אֱמוּנָה)です。いずれも「真実」「まこと」「誠実」などと訳されますが、これは神にも人にも用いられます。これは神の約束に基づく確かさを表しますが、それに答えるべきイスラエルの民にもこのことが求められます。しかし預言者たちによって、イスラエルの民にこれが欠如していることが指摘され、批判されています。しかし「終わりの日」には、この「エメット」(אֱמֶת)、ないし「エムナー」(אֱמוּנָה)が神の側からこれを実現し、回復されることが預言されています(ホセア 2:20)。「信仰」も「真実」も神の賜物であることが示されていきます。それによって、神に受け入れられ、救われるのです。この問題については、これ以上触れないことにします。

●「**信仰による義認**」こそ「**福音**」なのです。ところが、イエシュアや使徒たちが意味していた本来の福音

とは、私たちが「個人的な救い」として理解している福音とは異なります。「個人的な救い」は、自分が天国に行けるようになるために、私の罪を赦してもらい、神の子どもとしてもらうことです。つまり、「罪あるままでは天国に行けないけれども、イエシュアの十字架によって罪を赦してもらえば、罪人であった私たちも天国に行けるようになる」という次元でしか「福音」を捉えていないことを意味します。こうした福音は、別名、「福音主義」といえることができます。しかしイエシュアや使徒たちが語っていた福音とは、**イスラエルに対する約束の成就であり、今やキリスト(メシア)にあってそれが完成されたという良きおとずれのことです。異邦人キリスト者はメシアにあってこの約束に接ぎ木された者たちであり、これにあずかる手立て(手段)が「信仰による義認」という神の恵みなのです。**これは後で取り上げる「私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました」と関連してくる今日的問題をはらんでいます。どういうことかと言えば、「私は、神に生きるために、福音によって福音に死にました(真の聖書的福音によって福音主義に死にました)」と言えなくもないからです。「真の福音とは何か」を問うガラテヤ書の問題は、今日的な問題と言えるのです。

## 2章 17節

εἰ δὲ ζητοῦντες δικαιοθῆναι ἐν Χριστῷ εὐρέθημεν καὶ αὐτοὶ ἁμαρτωλοί,  
ἄρα Χριστὸς ἁμαρτίας διάκονος; μὴ γένοιτο.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2章 17節

しかし、もし、私たちがキリストにあって義と認められようとする中で、私たち自身も「罪人」であることになるのなら、キリストは罪に仕える者なのですか。決してそんなことはありません。

●17節は、「エイ」(εἰ)・「アラ」(ἄρα)構文です。「もし～であるのなら、(当然の結果として)～になる」という構文です。これは21節にも出て来ます。しかしそのことは「メー」(μὴ)で否定されています。

●17節は一体何を言おうとしているのでしょうか。話の流れとしては、ユダヤ人キリスト者たちが異邦人と食事をすることを避けたのは、異邦人と食事を共にすることで自分たちが汚れてはならないとする口伝律法の定めがあったからです。「口伝律法」とは、パリサイ人たちによるモーセの律法(成文律法)の解釈です。新約聖書で「先祖たちの言い伝え」とあればこの口伝律法を指していますが、パリサイ人たちの間では、口伝律法が聖書(モーセの律法)以上の権威を持っていました。これが「**律法主義**」と言われるものです。それによれば、パウロたちは異邦人と食事を共にしていたのですから、律法違反者ということになります。その責任者はイエシュアです。なぜなら、イエシュアはパリサイ人や律法学者たちの見解からするならば、律法の破壊者と見られるようなことを平気で行っていたからです。イエシュアは律法主義に対して全く自由であることを、身をもって示しました。その意味で、私たち自身も「罪人」になるということなら、当然の結果として、「キリストは罪に仕える者」ということになります。「決してそんなことはありません

せん」とパウロは言っているのです。

## 2章 18節

εἰ γὰρ ἄ κατέλυσα ταῦτα πάλιν οἰκοδομῶ,  
παραβάτην ἑμαυτὸν συνιστάνω.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2章 18節

もし自分が打ち壊したものを再び建てたら、私は自分が違反者であると証明することになるのです。

●17節で「決してそうではありません」と言った理由が、原文には「ガル」(γὰρ)で示されます。この節から「私」(パウロ)が主語となっています。

●ここで「自分が打ち壊したもの」とは、正確には「律法(トーラー)」ではなく、「律法主義」です。神の教えである「トーラー」(律法)それ自体は「聖なるもの」(ローマ7:12)なのです。「律法主義」は、人間的解釈を「聖なるもの」以上に権威あるものとする立場なのです。これは形を変えた偶像礼拝そのものです。神の子であるイエシュアの律法解釈と異なることは明らかです。イエシュアは変質してしまった律法の解釈を正すためにこの世にいられたのです。そのことを示しているのが、以下のみことばです。

【新改訳 2017】マタイの福音書 5章 17節

わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。

【新改訳 2017】マタイの福音書 12章 18~20節

18 「見よ。わたしが選んだわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は異邦人にさばきを告げる。

19 彼は言い争わず、叫ばず、通りでその声を聞く者もない。

20 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。さばきを勝利に導くまで。

●20節の「傷んだ葦」と「くすぶる灯芯」とは、変質してしまった聖なるトーラーのことで、これが「律法主義」、すなわち、口伝律法なのです。それを本来のものとして回復するためにイエシュアはいられたのでした。

●「律法」と「律法主義」とは明確に区別されなければなりません。ところが、いずれも「ノモス」(νόμος)という語彙を使っているため(というのは、律法主義を意味する語彙がないため)、文脈で見分けるしかありません。それが次節の「**律法によって律法に死ぬ**」という表現なのです。

## 2章 19節

ἐγὼ γὰρ διὰ νόμου νόμῳ ἀπέθανον ἵνα θεῷ ζήσω.  
Χριστῷ συνεσταύρωμαι:

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2章 19節

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。

●「私は、神に生きるために、律法によって律法に死ぬ」という部分の「律法によって律法に死ぬ」とはどのようなことなのでしょう。これは先ほど言った「律法と律法主義とは区別される」ことによって解決します。

●「死ぬ」という言葉の「アポスネースコー」(ἀποθνήσκω)は、「死ぬ」という動詞「スネースコー」(θνήσκω)に強意の接頭語の「アポ」(ἀπο)がついた合成語です。その1人称のアオリスト形「私は死んだ」が使われています。「律法によって律法に死ぬ」とは、「**聖なる律法によって、私は律法主義に死んだ**」という意味です。「キリストと共に十字架につけられた」というのは、実はそのことを指しているのです。大切なことは、神に生きるために、自分がそれまで拠って立っていた律法主義に死んだということなのです。そしてそれができるのは、キリストが律法主義という呪い(自己義認をもたらす偶像礼拝という罪のさばき)を代わって引き受けてくださったからなのです。

## 2章 20節

ζῶ δὲ οὐκέτι ἐγώ, ζῆ δὲ ἐν ἐμοὶ Χριστός:  
ὁ δὲ νῦν ζῶ ἐν σαρκί,  
ἐν πίστει ζῶ τῇ τοῦ υἱοῦ τοῦ θεοῦ  
τοῦ ἀγαπήσαντός με καὶ παραδόντος ἑαυτὸν ὑπὲρ ἐμοῦ.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2章 20節

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自身を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

●20節の「キリストが私のうちに生きておられるのです」というフレーズと、19節の「私はキリストとともに十字架につけられました」というフレーズは表裏一体です。19節が**キリストの十字架の死**を語っているとすれば、20節は**キリストの復活**を語っています。私を愛し、私のためにご自身を与えてくださった(=引き渡してくださった)十字架の死は現在完了形です。現在完了形はすでに完了した事柄が引き続い

ていることを表わす時制です。そしてまた、私のうちに復活されたキリストが生きているのは現在形です。そしてその信仰はやがて来られる**再臨**においても続きますが、「**キリストが私のうちに生きておられる**」という恵みについては、ここの箇所では取り扱われていません。それが語られるのは、ガラテヤ書の5～6章においてです。

## 2章 21節

οὐκ ἀθετῶ τὴν χάριν τοῦ θεοῦ:  
εἰ γὰρ διὰ νόμου δικαιοσύνη,  
ἄρα Χριστὸς δωρεὰν ἀπέθανεν.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 2章 21節

私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

●ここの「もし義が律法によって得られるとしたら」の「律法」は「**律法主義**」のことです。それは神が人間のために備えられた救いのご計画よりも、人を支配するために人間が解釈した口伝律法のことです。禁止や罰や命令からなり、しかもそれを行うことができないにもかかわらず、人にそれを強いて、さばいてしまふという欺瞞に満ちた教えなのです。そのような律法主義の教えで義を得ることができるとしたならば、キリストの死は無意味となってしまうのです。パウロはこの律法主義にキリストと共に死んだのです。それはパウロがキリストとともに生きるためです。

●「私は神の恵みを無にはしません」の後には、「**なぜなら**」という理由を示す「ガル」(γὰρ)があり、17節と同じように、「エイ」(εἰ)・「アラ」(ἄρα)構文があります。「**もし義が律法によって得られるとしたら、その結果として**(「アラ」 ἄρα)、キリストの死は全く無意味になってしまう」というものです。

●最後に、ギリシア語の接続詞や時制を学ぶことによって、文章の成り立ち(構文)がより鮮明になってきます。これはヘブル語にはないギリシア語特有の利点です。ですから、みことばを真剣に学ぼうと思う者にとっては、ギリシア語の学びは不可欠とも言えるのです。